

さよなら ヒューマン・ビーイング

三枝木 水母人

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。
よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。
世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。

(方丈記・無常のことわり)

■ 目次

サンクト・ペテルブルグ	4	カタストロフィ	128
コロラド	7	群集	131
大津	10	防衛大臣・薄葉宏	136
新宿	14	アレクサンドル・イリイチ・リヤコフ	139
モスクワ	16	終章又は序章	141
ヒデオ	22		
ヒカリの変	29		
アメリカ	32		
プレジャー・マシン	37		
超能力開発研究所	43		
ユリ	48		
疑惑	54		
マリコ	63		
中性子爆弾	69		
自己増殖マシーン	73		
ネオ東京	75		
復讐の連鎖	78		
調査先遣隊	81		
NHQ	86		
完全クローン脳	91		
サイボーグ・宮下	93		
極秘作戦	95		
黒い塊	98		
違和感	100		
『神聖ユダヤ日本』	103		
諜報戦争	108		
佐々木オマル	111		
京都	115		
人類問題の最終解決	117		
太陽系シミュレーター	119		
昇華	123		
ヤヌス	125		

サンクト・ペテルブルグ

その日は『君の内なる声』からの予言が指定する日だった。アレクサンドル・リヤーノフはびつしよりとかいた汗の中で目を開けた。こわばった体にリネンのケットがはり付いている。ほとんど眠った気がしなかった。未曾有の惨劇をもたらす核爆弾がサンクト・ペテルブルグで爆発するというのだ。冗談であつてほしかった。しかし、このメールがそんな茶目つ気とは無縁なことは分かっていた。しかも、今までこんな大それた内容のものは無かったのだ。

そもそも、この『君の内なる声』と言うメールに気づいたのは三月前だった。いつものように朝の日課として迷惑メールを一つ一つ点検、消去している時だった。ドラッグの宣伝、セックスの勧誘、ウィルスソフトの贈り物とあいも変わらず劣情を刺激してうまく人を陥れようとする知恵が世界中から押し寄せていた。フィルターをすりぬけて来るものばかりだから、その成り済まし技術、侵入テクニクはきわめて高度だ。完全隔離の中、注意深くチェックしなければならぬ。

『君の内なる声』はニュース・メールの体裁で全く怪しい雰囲気は無かった。ウイルスチェックをしても問題が無い。

そのメールによればイズマイラボに帝政時代のレア物のアイコンが売り出されている。君に買われるのを待っている、と言うのだ。この蚤の市はすでに百年以上にわたってここで開催されているが、売っているものは玉石混交とあってよい。散歩のついでにこのメールを思い出して覗いたのだが、そのイ

コンは直ぐに分かった。アレクサンドルの目がイエスの目とぼったり合ったのだ。まるで知り合いと道で突然逢ったように。その目は力強くアレクサンドルの心に迫ってきた。今も目の前に飾つてある。それ以来このメールのチェックを欠かしていない。最近ではスモレンスクでのインフルエンザの流行を知らせてくれた。おかげで予防ワクチンを摂取して旅先の病を回避できたのだ。

核爆弾は十キロトン規模で長崎に投下されたプルトニウム型。その出所は元をたどればロシア・ソヴィエト時代の閉鎖都市、セヴァストポリだと言う。海軍の戦術核が隠匿され、いま表に出てきたらしい。

アレクサンドルは一応、匿名で当局にそれとなく知らせたのだったが、特別の対応がとられた様子は無かった。いたずらと片付けられたのかもしれない。何度も連絡を入れれば反対に嫌疑をかけられて拘束されることも考えられるのでそれ以上の警告はしていない。

紫檀のテーブルの上にはバラの花がひとつ描かれたカップが載っている。中にはイチゴジャムをたっぷり溶かした紅茶が入っている。もう湯気はほとんど上がっていない。淹れてから一時間くらいは経っているだろう。アレクサンドルはビクトリア朝風の凝った椅子に座ってひじを立て手を組んでじつとその液面を見ていた。部屋の奥、北側に当たる壁には大理石のマントルピースがある。暖炉には燃え残りの火が最後の輝きを時々見せていた。上においてあるこれもビクトリア朝風の金色の時計が九時二十五分を指していた。まんじりともしないまま夢遊病者のように起き出して紅茶を入れてただ座っていたのだ。十一時まではまだ一時間半ほどある。秒針が規則的に刻まれる音だけが聞こえた。

子供の頃のいやな記憶が蘇える。

「コラーツ、マテソコノガキ」

それは全く聞いたことの無い言葉だった。何を言っているのか見当もつかなかった。ただ怒っているのだけはよく分かった。すごい剣幕で芝生を走ってくる姿が見えたからだ。アレクサンドルはとっさに逃げようとして後退さった。しかし遅かった。すさまじい勢いで倒れこみながら男が肩をつかんだ。

「ナニシテンダヨー」モンゴル人らしき男が怒鳴った。

「イズヴィニーチェメニヤ」

「ナニ、イッテルンダ、コノヤロウ」男はそういうといきなり平手でアレクサンドルの頬を叩いた。

アストラハン郊外に出来たゴルフ場はアメリカ資本が造ったもので、アメリカ人、ドイツ人とともに日本人がよく利用していた。地元民はゴルフを全く知らないもので、ましてこどもにとっては何をやっているのか見当もつかない状態だった。彼は友達と木の実を取りに来ていて急に目の前が開けて見ても無い白い玉が落ちているのを発見したのだった。

ズシン。床が振動した。

突然平衡感覚が失われた。地面が揺れている。目の前の紅茶の入ったカップもカタカタと音を立てた。地震だ。以前アメリカで経験したものだ。サンフランシスコでコンサートがあったとき大きな地震に襲われたのを思い出した。あの時は、はじめ周期の短い縦揺れがして、その後大きな横揺れがしばらく続いた。

あのときのゴルフアーはいったい何人だったのだろう。アレクサンドルは思考が混乱していること

を自覚していた。今サンクト・ペテルブルグで核爆発があったのだ。

コロラド

アメリカの軍事衛星フェニックスは静止軌道上に八個あるセンチ単位で物体を識別する監視システムである。極軌道を回る四個の軍事偵察衛星ベガスとともに常時地球上を監視している。

覇権国家アメリカ合衆国は世界を征服した。軍事技術の突出した発展がそれを可能としたのである。地球上どこに発生した紛争もアメリカの監視下に無いものは無い。あえてこの支配に対抗するものは一瞬にして粉碎される。軌道上の収束レーザー兵器で破壊できないものは戦術核ミサイルが間髪をいれず襲ってくるのだ。これほどまで覇権に執着する理由は今では世界中が知ることだった。ドル経済圏の維持発展、それだけである。ここで言う「発展」と言う言葉には世界経済の拡大と言う意味は含まれていない。ドルが決済手段として使われ、価値基準として一分のすきも無く使われると言う意味以外には無いのである。

覇権が確立することと平和が達成されることがこれほど乖離した世界も今まで無かった。一方に巨大な軍事力が集積しているのに対してテクノロジの民主化によって誰もが大規模な破壊を実行できる武器を持っているからである。世界支配が行き着いた場所は戦場のグローバル化だったのである。

かつてのアメリカ合衆国首都、ワシントンDCは完全に消滅し、首都機能はNORAD（北米航空宇宙防衛司令部）に統合されている。コロラド山脈には巨大な地下都市が形成されているが、詳細は

秘密のベールに包まれていた。すでに二十世紀から核シエルトを盛んに造っていたので大規模な地下空間が形成され、それらがネットワークで結合されていても不思議ではない。しかしいかに巨大な地下施設とはいえ四億人のすべての人々を収容するのは不可能であった。地上よりも安全な地下で生活できるものとそうでないものが必然的に選別されざるを得ない。

いまやアメリカ人は地下生活者と地上生活者の二種類に分類されるのである。地下生活者は経済的ヒエラルキーの上層に属す家族だ。納税額に応じてプラチナカードという居住優先度を示すカードが与えられる。このカードは聞取引もされていたが、おおむね混乱無く受け入れられ運用されていた。地底生活者は安全と引き換えに太陽を失ったのだった。地上生活者は反対に、とりあえず太陽を得たが、過酷な環境に耐えなければならぬ。地球温暖化と核の冬が交互に複合的に進行しているので自然現象が並外れて激烈だった。ハリケーンは竜巻並みの威力を持っていたし、雨はひとたび降ればいたるところに洪水を引き起こしていた。また、直射日光の強さは二十世紀を知っている人間には想像できない激しさでしばしば火傷をするほどだった。当然皮膚ガンも多発しているので太陽が出ているときは日陰にこもるしかない。

自然現象以上に耐えがたいのが頻発するテロである。アメリカは世界覇権を徹底すべくイギリス、イשראלと枢軸同盟を結び南北アメリカ大陸、ヨーロッパ、西アジア、アフリカを武力制圧している。中央、東アジア地域はなかなか本当の同盟国を見出せずいまだに模索中であった。日本は時々親米的な政権ができるのだが、必ずその反動が起こる。すなわち反米ないし、非米政権がその後にくるのだった。したがって米軍は軍事技術も日本に対してはなかなか公開できない。このアジアにおける

「不安定の島」（国防長官・ウォルター・ボーン）の存在は、地球規模の防衛、攻撃システム構築において致命的な欠落だった。

一見平和そうに見える地域もひと皮剥くとテロリズムの嵐に襲われていた。そもそもテロは少数者の武力闘争だから当然である。事態を複雑にしているのはテクノロジーの発達であった。自動的に技術開発が進むので誰も知らないうちに新しい武器、兵器、機械が出来るのだ。人間のあずかり知れぬところでそれらは開発されていた。

発明、発見が人間の仕事でなくなつてから久しい。コンピュータの予測プログラムがあらゆる可能性を発見、創造して、これを実験するのである。発明と発見の組み合わせはほとんど無限の個数があるのだから生身の人間には物理的に関与できない分野となつたのである。人間に出来ることは探すことくらいである。そしてこの探すという作業が検索技術の発展でごく簡単になつたため、誰でも必要とする知識、技術をいつでも、どこでも見つけ出すことができた。テロリストはプログラム化された作業をつなぎ合わせて目的にあわせた技術的統合を行うだけなのである。その上、かつて嚴重に管理されていた情報や、技術が、ほとんど共有化されていたのだ。このような環境の中、誰でも意思を持つものは必要な知識を簡単に手に入れ利用することができる。

更にテロリストの便益を助けたのは生産機械がほとんどユニット化され汎用性があることだ。何を作るのもユニットの組み合わせ変更で可能となつてしまったのだ。たとえば地球上のいたるところにあるクレーターを作った高性能プラスチック爆弾。原料が植物由来のためどこでも誰でも大量に製造できるので手軽に使われていた。雑草からゲルコースを精製するユニットと空中窒素固定ユ

ニットを使えば簡単に爆薬を製造できるのである。組織的に使用する場合、気化爆弾を併用するので破壊力は数百倍になる。ニューヨーク、シカゴ、ロサンゼルスなどを覆う直径百メートル前後のクレーターはその複合爆発によってできたものだった。

大津

高高度から映された日本列島は、若干の海岸線の変化はあるものの有史以来変わらないタツノオトシゴのような形で横たわっていた。所々に白いぼんやりとした雲の塊があつて、見ようによつてはともどかな様子である。北アメリカ、ヨーロッパがクレーターに覆われているのは大違いだ。

北海道の中央部大雪山系、石狩山地にはまだ多くの雪が残っていて白く輝いている。糸巻きエイが泳いでいるような形の大地はほとんどが山岳地帯と原野なので針葉樹と寒冷地に適応した草の深い緑が覆っている。札幌で大規模な下水道ガステロが起きたことなどウソのような風景だ。

札幌は下水道の普及率が高かったがそれが逆に災いしたのだ。市内数箇所が発生した揮発性VXガスが下水道を通じて全域に広がったのだ。死傷者二十万人の惨事となった。この事件が起きてからすでに五年が経っていたが真相はいまだに闇の中だ。と言うのも実行犯がすべて捕まつたにもかかわらず彼らに正常な判断能力があつたのかどうか争点となつてしまったのである。全員が一種の自己暗示、マインドコントロール下にあつたのは明らかなのだが、そのマインドコントロールを自分たち自身にかけたのか、あるいは互いにマインドコントローラーとなつたのかどうかと云う点で捜査が